

## 外科の診断・治療に欠かせない基礎医学

対談者：前田 尚武

軽井沢町立国民健康保険軽井沢病院 院長

浅野 克則 同 麻酔科医長

聞き手：鈴木 信夫

ゐのはな同窓会広報担当常任理事



浅野先生 前田先生

.....

鈴木：医師確保対策で様々な工夫をしている長野県について、県内の病院に勤めている先生方へインタビューをお願いしています。長野県衛生部医療政策課・医師確保対策室の紹介で、今日はお忙しい中、浅野克則先生をお願いいたしました。まずは、浅野先生ご自身の自己紹介をお願いいたします。

浅野：麻酔科医をしている浅野克則です。文科系の大学生だった20歳の時に病気で1ヶ月半ほど入院したのですが、その時の看護婦さんがとても優しかった。不純な動機ですが、医者になれば看護婦さんと親しくなれるかと思い、旭川医大の医学部に入り直しました。自然が好き、スキーが好き、山が好きだったので北海道を選びました。卒業後、やりたい科がはっきり決まっていなかったため、全科を研修しました。その当時から、自然の豊かなところで働きたい、診療所の医者になりたいとの思いがありました。そこで、当時から全科ローテーションの研修システムを採用していた佐久総合病院の総合ローテーション研修医として入りました。2年間の研修後、麻酔科を選択しました。診療所に行くことを考えれば、内科が良かったのかも知れないのですが、研修中に気持ちが変わり、早い時期に自分で色々なことができ、医者として働いている実感の持てる麻酔科を選びました。佐久総合病院に13年間勤務し、その後、内視鏡外科手術を特徴にした四谷メディカルキューブを東京に新設する話がありましたので転職して、4年間勤務しました。しかし、何時かまた長野に戻りたいという思いが強く、長野に戻ってきた次第です。私は44歳ですが、歳を取るにつれて、大きな病院よりも小さな病院で和気藹々と働きたいという思いが芽生えてきました。そこで、以前勤務していた佐久総合病院ではなく、町立軽井沢病院に就職することにしました。

鈴木：四谷メディカルから、もう一度長野県に戻ろうと思った理由をもう少し聞かせて頂きたいと思います。また、出身が埼玉県とお聞きしましたので、そちらで活躍しようとか、色々な思いがあったのではないですか。

浅野：佐久市や軽井沢町のある長野県東部地域一帯は、佐久平と呼ばれるひとつの地域なんですね。佐久総合病院に13年間勤務している間、この地域で育てられたという意識があります。ここの人や自然が好きで、第二、第三の故郷という感覚がありました。戻るならばこの地域にと考えていました。敢えて別の理由をつければ、東京は土地が高く家が建て難いし、満員電車での通勤地獄から抜け出したいということもありました。山が近くて山登りもできるとか、そういう自然のある環境に憧れていたんですね。あまり迷うことなく決めました。娘が中学入学の時期で、丁度、区切りだったということもありましたし、家族の反対もありませんでした。

鈴木：軽井沢病院に勤務し 3 ヶ月間ではありますが、良かったと思うことなどをご紹介ください。

浅野：ここのベッド数は 100 床程度で、常勤医は 10 人、その他に非常勤医が勤務しています。医局は家族的な雰囲気にもまれたひとつの部屋ですから、その場で仲間に色々な相談もできます。そうした規模の病院で働きたいという思いもありました。看護師さんも、医者が少ない分いろいろな仕事をして下さるし、口頭指示で OK とか、電子カルテを後から記入しても許されるなど、こうした点が思ったより働きやすいと感じています。

鈴木：麻酔医の視点からのコメントはありますか。

浅野：麻酔医は、医者としては特殊だと思っています。毎日、午前中は外来のペイン・クリニックをしています。午後は手術の麻酔です。麻酔科が管理するような全身麻酔を行う手術は整形外科、外科だけです。全身麻酔は、一週間平均で 4 ~ 5 件ですから、外勤日を 1 日作ってもらい、佐久総合病院で勤務しています。以前働いていた病院ですから、仲間や色々教えて頂いた先生などから活気のある刺激を受けられ、別の情報も得られます。1 週間の内、色々な形態で働けることに満足しています。

鈴木：私生活面では、子供さんの教育など、都会的な生活も充足できますか？

浅野：軽井沢町は長野県内にありますが、新幹線を使えば東京まで 1 時間 10 分ほどで行けます。日帰りで用事を済ませることもできます。東京は銀行やコンビニ等の利便性があるので、寂しい面もありますが、それ以上に豊かな自然や人間関係などで得られるものがあると実感しています。

鈴木：研修を考えているお医者さんに参考となるコメントがあればお願いします。例えば、全科研修の経験をお持ちですが、最近の初期研修制度ではそれができないように変わろうとしています。そうした点で、先生のご意見も含め、何かありましたらお願いします。

浅野：全科ローテーションシステムは、医者が専門に入るのが遅れるということはあると思いますが、長い目で見れば、幅広い知識を身につけられる点で良いシステムだと思います。佐久総合病院の全科研修で得たことは、自分の財産となっています。当時、多くの研修生が初めからひとつの科を選んでいましたから、先見の明があったと自我自賛しています。医者の知識を広めるという点では良いと思います。ただ、その結果、大学病院の医局から派遣される医者がいなくなり、地方の病院が切り捨てられているということを考えると、大学の医局制度に再度戻るとするのは疑問ですが、地方にも医者が行けるような何らかの制度は必要だと思います。強制的なものではなく、都会に集中しないようなシステムは必要な気がします。研修などで、若いうちは大きな病院で働きたいとの思いはありますし、いろいろな患者さんに接することによって学べることも多いです。若いうちから小さい病院に行くことは、学ぶという点では余り良いことではないかも知れません。私のように、ある程度の年齢になれば地域の病院に行くことも良いのかなあ、と感じています。

鈴木：ここからは、前田尚武病院長に加わって頂きます。軽井沢病院についてご紹介頂きますが、その前に、前田先生のご卒業後のご経歴について、ご紹介ください。

前田：昭和 45 年に卒業後、基礎で病理学を学んでから都立病院、それからアメリカに留学し、帰国してからは千葉大学第一外科学教室に入局しました。千葉県内病院で 27 年

に亘り、公立病院で色々な経験をしました。最後は臓器制御外科学の宮崎勝（昭 50 卒）教授、及び現軽井沢町長・佐藤雅義様からのご推挙と、私の出身が小諸市だったこともあり、当院の院長を務めることになりました。

それでは、当院の現況等について話をします。ご承知の通り、軽井沢は標高 1000m 程にある世界的なリゾート地ですから、保養地としての町であり、また、風光明媚なので観光も盛んな町です。軽井沢の知名度は非常に高く、ブランドとしての軽井沢病院名が知られていますので、職員、看護師、医師の方々には興味を持って来て頂けます。町の人口は、1 万 9 千人位ですが、夏季には 60 万人と非常に多くの方が訪れますので、救急病院として当院の対応は重要であると思っています。

鈴木：診療科が幾つかあり総合的な病院と思いますが、更に加えるならば、どのような診療科をお考えですか。

前田：当院は総合病院となっていますが、非常勤の医師が 32 人と多くおります。常勤医については、新しく麻酔科の浅野先生、産婦人科の満下淳（みつした・あつし）先生に加わっていただいたので、10 人となりました。新しい先生が来て一番喜んでるのは住民の方です。この地区は寒いこともあって、痛みを苦しむ住民が非常に多く、痛みが取り除かれると生活に潤いが持てるようになりますので、当院の評判は大変良いのです。また、病院にも活気が出てきて、職員、スタッフの医療へのモチベーションは、明らかに向上しています。

鈴木：浅野先生は、ペイン・クリニックを開院するという意志で就職したと聞きましたが、就職するに当たり、不安もあったと思います。新しい科を開こうとして就職する医師の方々に、浅野先生のご経験からアドバイスがありましたら、お聞かせください。

浅野：就職をする前に、まず病院をじっくり見学して、どういう施設があるか確認することです。例えば、ペイン・クリニックでは患者さんが休むためのベッドがある程度必要ですから、自分の使えるベッドが幾つ確保できるのか、看護師さんが対応してくれるかなど、就職を決める前に下見をして予めチェックすることは重要です。

鈴木：この病院では、スムーズに行きましたか。

浅野：私はこの 4 月から働いていますが、去年の 8 月に見学させて頂き、看護師さんから色々話を聞いて、使えるベッドもあるというのを確認しました。ここならできると判断し、1 ヶ月後に就職を決めさせて頂きました。

鈴木：病院長先生にお聞きしますが、研修制度なども変わって医療情勢も大変な時期ですが、立場上ご意見がありましたらお聞かせください。病理を研修したご経験も含め、若い先生方に伝えたいことなども、お願いいたします。

前田：基礎をやってきてよかったと、私は思っています。外科医は病理と非常に関連があり、診断、治療に対して基礎はとても大切です。ただ、今の研修制度では、卒業して直ぐに 2 年間の研修となるので、なかなか基礎を学ぶ機会がありません。研修が終わってから基礎を学び、基礎から臨床に行くのか、それとも、少し臨床に行って基礎を修得するのかは、非常に判断の難しいところです。順番としては、基礎から臨床が良いと思います。若い時に基礎を学ぶ方が良いのですが、今の研修制度では基礎を選択する人が少ないですね。軽井沢病院のような地方の病院としては、直ぐに研修というのは受け入れ難いのですが、後期研修を終わって、殆どの科を回ってジェネラルなことが出来るようになったら、是非、軽井沢の方にも目を注いで頂

きたい。地方の医療について勉強も出来ますし、成果は直ぐに患者さんに現れます。

鈴木：研修医が希望することとして、週に1日位は自己学習が出来る日を設けてくれる病院が好ましいとの声があります。当院としては、そのような要望に応えられるのでしょうか。

前田：はい、考えています。私自身も若い頃、週に1日大学病院で研修をさせて頂いたり、専門の病院、癌研究会附属病院などにも行かせてもらいました。希望があれば、どんどん勉強して頂きたいと考えています。

鈴木：浅野先生のご意見はありますか。

浅野：今でも、週1回、金曜日に佐久総合病院に麻酔医として勤務しています。勉強ではないですが、佐久総合病院に行くことで、同じ麻酔医の先生と話ができる、研修医に教えることによってこちらも勉強出来るという刺激を得られます。ですから、週1度そうした機会を与えられるのは有難いです。

鈴木：病院長先生へお聞きしますが、地域医師会の先生方との交流についてはどうですか。

前田：当院はどちらかという群馬県に隣接し、長野県の隅っこにあるので、長野県医師会などとの交流は地理的に難しい点もあります。しかし、この地域に公立病院は、浅間病院と当院だけです。重責があり、色々な役員もさせて頂いています。医師会の先生方で軽井沢病院を助けて頂だける制度もあります。夜間の救急は月曜日から金曜日まで輪番制で、全て開業医の方々にやって頂いています。病院を盛り上げて頂いているような環境です。

鈴木：当院の福利・厚生面はどうですか。

前田：福利・厚生については、遠くから来ていただく職員に関しては、看護師さんは病院の方で宿舎を用意します。医者は医師専用のコンドミニアムが5戸と戸建が5戸、医師10人の宿舎を設けています。医療の中心となる病院は当院しかありませんので、町長さんも当院に対して非常に力を入れております。

鈴木：最後に、若い学生や研修医へのメッセージとして、さらに何かありましたら。

前田：若い先生が、当院のような100床程度の小さな病院に突然来るのは無理だと思います。研修には、資格の問題、認定医、専門医、指導医、などがありますので、資格を取得出来る大学などで研究、手術などを経験して頂き、後期出張あたりから、当院へ来て頂ければ有難いですね。そうすれば、直ぐ実力を発揮して頂いて、住民のための診療、診察が出来ると思います。

鈴木：今日はお忙しい中、インタビューの時間を割いて頂き、有難う御座いました。



長野オリンピック記念楯



ねえね 大すき